

天気予報
(今日・明日・明後日)

気象台ホームページ

北海道農産協会

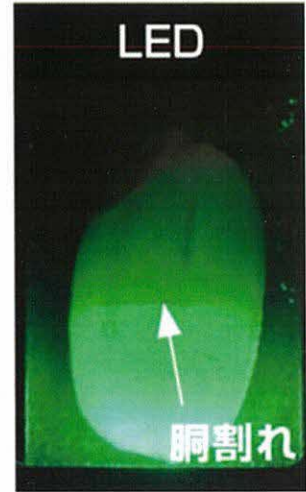
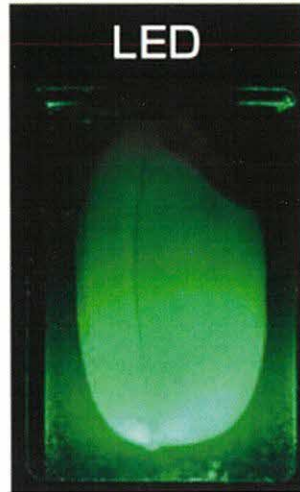


令和4年

高温登熟時の「胴割粒」発生防止対策

整粒

胴割粒



胴割粒 (LED光を当てると、胴割れが鮮明になります)

もち米胴割粒透視器「TX-300」(株式会社ケツト科学研究所)

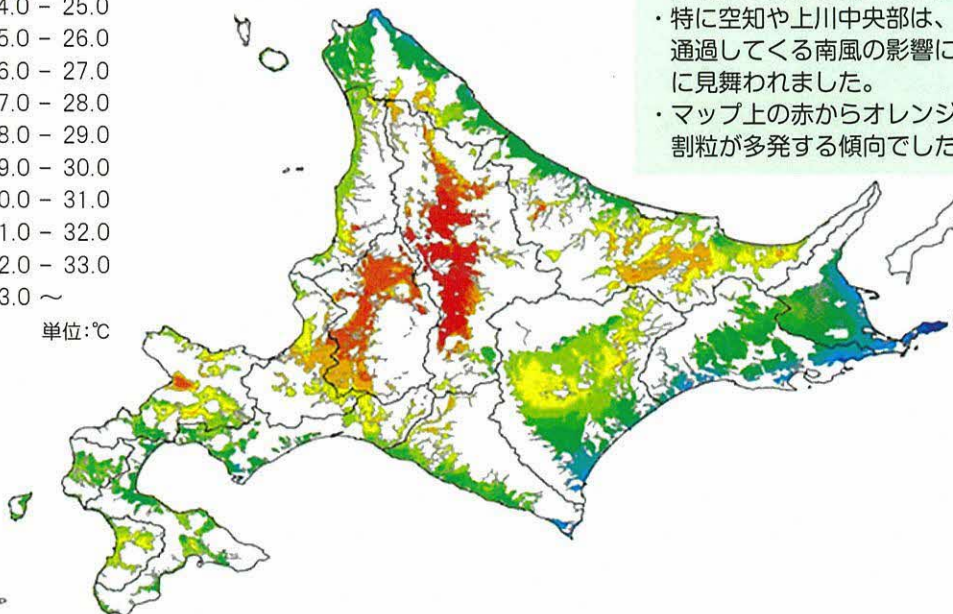
令和2年度オホーツク管内『きたゆきもち』安定確収マニュアル(胴割粒防止編)より

令和3年の猛暑を振り返る

- ・令和3年の猛暑は、太平洋高気圧が例年より早く道内全域を覆うように張り出し、フェーン現象も重なったことが主な原因です。
- ・特に空知や上川中央部は、苫小牧から内陸を通過してくる南風の影響により記録的な猛暑に見舞われました。
- ・マップ上の赤からオレンジ色の地帯では、胴割粒が多発する傾向でした。

- ~ 22.0
- 22.0 - 23.0
- 23.0 - 24.0
- 24.0 - 25.0
- 25.0 - 26.0
- 26.0 - 27.0
- 27.0 - 28.0
- 28.0 - 29.0
- 29.0 - 30.0
- 30.0 - 31.0
- 31.0 - 32.0
- 32.0 - 33.0
- 33.0 ~

単位:℃



7月20～8月5日の最高気温分布図(中央農試水田農業部提供、十勝農試堀内優貴氏作成)

2022年7月

令和4年 胴割粒発生防止対策 ~令和3年の反省に基づく技術対策~

対策1：登熟期の高温対策

- ① 出穂後～10日の平均日最高気温が高いほど、胴割率は高くなります（図1）。
- ② 出穂後20日以内で、日中の気温が29℃以上、夜間も23℃以上になる日が5日以上続くと予測される場合、地温や稲体周辺の気温を下げることを目的として『かんがい水の掛け流し』を行い、高温による胴割粒発生防止を図ります（図2）。
- ③ なお、『かんがい水の掛け流し』については、地域の水事情を十分に考慮した対応を取ることが必要です。

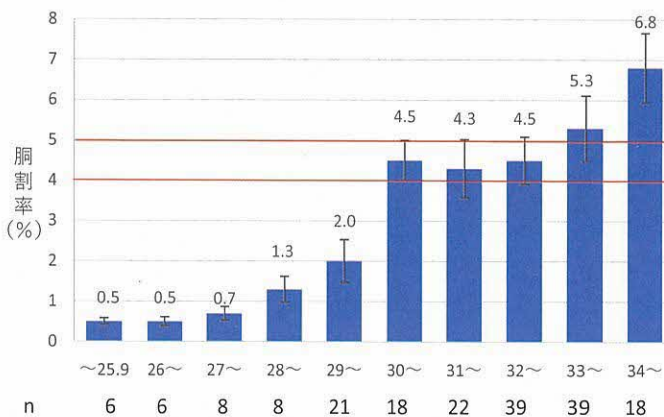


図1 日最高気温（出穂後1-10日）別の胴割粒発生割合（令和3年産米高温による収量・品質影響調査、道農政部調べ）

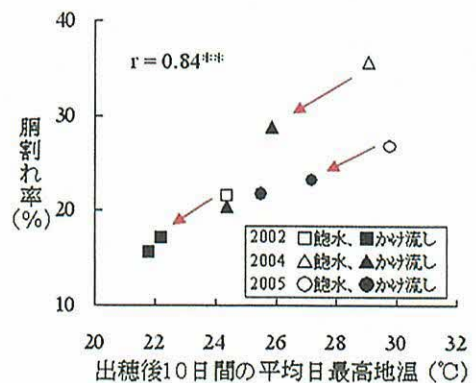


図2 出穂後10日間のほ場内地温と胴割率の関係（2002～2005年、東北農研センター、「あきたこまち」）

対策2：登熟期の土壌水分確保

- ① 落水時期が早く、土壌表面が乾燥し過ぎることで亀裂が入り、根が切れて水稻の吸水力が低下します。このことが登熟不良や粒重低下などを招き、胴割粒発生リスクに繋がります（図3）。
- ② 収穫10日前頃までは、土壌表面に1 cm以上の亀裂を入れないような水管理を行う必要があります（写真1）。
- ③ 登熟期後半の適正な土壌水分は、土壌表面に小さな亀裂ができ、足を踏み入れた際、わずかに足跡が付く程度（pF2.3以下）が目安となります。

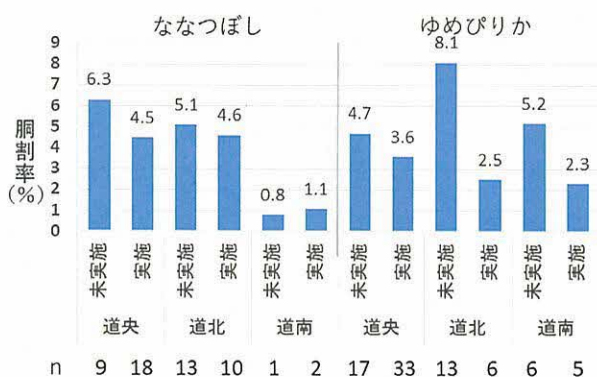


図3 出穂後のかんがい実施状況（令和3年産米高温による収量・品質影響調査、道農政部調べ）



写真1 タップリと入水されたほ場（令和3年8月中旬撮影）